

詩の起源

有 本 芳 水

日本民族は、独特な音律をもつ、日本の言語を基準とし、その調律の流動旋回と相まつて、ここに日本固有の伝統ある詩歌が生れた。

日本の詩歌には、短詩型と長詩型とあり、短詩型には、片歌（五七七の十九音型）、短歌（五七五七七の三十一音型）、短歌の一体として別の詩風を完成した俳句（五七五の十七音型）旋頭歌（五七七五七七の三十八字型）俚謡（七七七五字の音型）等があるが、このうち片歌と、旋頭歌は現今は行はれてゐない。旋頭歌は萬葉集時代さかに行はれ、また江戸時代、明治時代にも作られたが、今は殆んど廢れて見られ無くなった。

長詩型のものには、長歌（五七調の連続体をもつて、反歌を添える）、今様（七五調四句より成る、古き都を来て見れば、浅茅が原とぞ成りにける、月の光はくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ、の如きもの）神楽歌、催馬楽、和讃等があり、主として七五の整調をもつてし、七五調の軽快を楽しませた。他に各種の物語のうちに、七五調の連続体を交えたものもあつた。例えば太平記の俊基朝臣の東下りの一節、落花の雪に踏み迷ふ、片野の春のさくら狩り、紅葉の錦着て帰る嵐の山の秋の暮、の如きもの、同じ太平記の大塔宮熊野落の一節、由良の港を見渡せば、渚こぐ舟の梶緒たえ、浦の浜ゆふ幾重とも、知らぬ波路になく千鳥、の如きもの、平家物語の頭にある、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり、沙羅双樹の花のいろ、盛者必衰の理をあらはす、おこれるもの久しからず、ただ春の夜の夢の如し、たけき者もつひに滅び

ぬ、の如きもの、近松の浄瑠璃の曾根崎心中の一節、この世もなごり世もなごり、死して行く身をたとふれば、仇しが原の道の霜一足づゝにきえて行く、夢の夢こそあはれなれ、あれ数ふれば暁の、七つの鐘が六つなりて、のこる一つが今世の鐘のひびきのきをさめ、の如きもの、馬琴の八犬伝の一節の如きもの、これらはすべて七五調の詩の形をとり入れ、哀々綿々の主調を成してゐる。

日本の詩歌、とりわけて、短歌、俳句においては、先人の美を学び、伝統を尚び、香気高く、芸術上の精進は、いよいよ根づよさを加ふるに至つたが、しかし日本には、欧米諸国に於いて、古くから行はれてゐる詩と称すべきものが無かつた。長歌、今様の如きは、詩と言つて言えないことはないが、その詩形において、僅かに短歌が変型して、その一体を整えたにすぎなかつた。

明治維新の大業が成就されるに及んで、潰河の勢をもつて入り来れる歐米文化の影響をうけて、文芸の方面においても新風が流れ込み、短歌、俳句等伝統ある国詩に対しても旧態に泥むべからずとして、革新が叫ばれ、遂に欧米諸国において古くから行はれてゐる詩を、模倣し、これとり入れて、日本に於いても短歌、俳句とはちがつた詩が生れるに至つた。

夙に西詩に親しみ、これを模倣して、新しい国詩の提唱を意図してゐた外山、山（正一）は、これに共鳴する同志の矢田部尚今（良吉）、井上巽軒（哲次郎）と合著で「新体詩抄」を編纂刊行した。明治十五年七月二十一日版權免許、丸屋善七発行、菊版、序文一四頁、凡例二頁、目次二頁、本文一〇六頁、跋文二頁、定価十五錢であつた。収むるところの詩は訳詩十三篇、創作六篇、合せて十九篇で、訳詩にはブルウムフキールドの「兵士帰郷の詩」、テニソンの「輕騎隊進撃の詩」、ロングフェローの「人生の詩」、キングスレーの「悲歌の詩」「高僧ウルゼーの詩」、カムプベルの「英国海軍の詩」、グレーの「墳上感懷の詩」、テニソンの「船將の詩」、ロングフェローの「児童の詩」、シエクスピアの「ヘンリー第四世の詩」、全ジシエクスピアの「ハムレットの詩」があり、創作には「玉の緒の歌」「抜刀隊の詩」「勸学の歌」「鎌倉大仏に詣でて感あり」「社会学の原理に題す」「春夏秋冬の詩」を収めた。その序に言う。

泰生の詩、世に従つて変ず、故に今の詩今の語を用ふ、周到精緻、人をして翫読倦まざらしむ、茲に於いてか又曰く、古の和歌取るに足らざるなり、何ぞ新体の詩を作らざるや。――巽軒居士井上哲次郎

頃者同志一二名と相謀り、我邦人の從來平常の語を用ゐて詩歌を作ること少なきを嘆じ、西洋の風に摸倣して一種新体の詩を作り出せり。――尚今居士矢田部良吉

人の鳴らんとする時は、しやれた雅言や唐国の、四角四面の字をもつて詩文の才を表はすも、我らが組に至りては新古雅俗の凶別なく、和漢西洋ごちやまぜて、人に分るが專一と、人に分ると自分極め、易くかくのが一つの能。――山外

山正一

またその凡例に言う

均しく是れ志を言うなり、而して支那にてはこれを詩と云ひ、本邦にてはこれを歌と言ひ、未だ歌と詩とを総称する名あるを聞かず、此書に載するところは詩にあらず、歌にあらず、而してこれを詩と言うは、泰西の「ポエトリー」と言う語、即ち歌と詩とを総称する名に充つるのみ。

和歌の長きものはその体或いは五七、或いは七五なり、而して此書に載するところも亦七五なり、七五は七五と雖も、古の法則に拘はるものにあらず、かつそれ此外種々の新体を求めんと欲す、故にこれを新体と称するなり。

と、かくして詩の意義を西洋の Poetry「ポエトリー」に求め、語調は日本旧來の七五であるが、新体であり、古の法則に拘はるものにあらずとして、これを新体詩と名づけ、ここに新体詩なる新語が生れたのであつた。新体詩なる語は明治から大正の初め頃まで用ゐられたが、今は單に詩と称するようになった。

著者の外山正一は、当時三十四才、東京帝大社会学担任教授、後に貴族院議員に勅選され、東京帝大総長となり、伊藤博文の下に文部大臣となつた。井上哲次郎は当時二十七才、東京帝大で哲学担任の助教授、後に教授、文科大学長、貴族院勅選議員となつた。矢田部良吉は当時三十一才、東京帝大理学部の助教授で植物学を担任、後に東京高師の校長になつ

たが、鎌倉で水泳中溺死した。いづれも三十才前後の青年であつた。

兵士帰郷の詩

外山、山

涼しき風に吹かれつゝ

椅子にもたれてあるさまは

その坐をしめし腰掛の

四十路の昔ありありと

猶ほありありと見ゆるなり

もとに変らぬその音色

みつる思ひはなほ切に

忘れんとして忘れず

後に掛けし古略歴

ひらりひらりと誘はれて

嵐に逢うて翻へる

ありし昔のわが父の

実に心地よくありにける

堅く作れる臂掛に

刻みのこせるわが名前

掛にかけし古時計

ききて轟ろくわが胸に

はりさく如く堪えがたし

嗟嘆に堪へぬその時に

忽ちよするそよ風に

上るは是ぞ陣前に

小旗とこそは見ゆるなれ

(以下略)

軽騎隊進撃の詩

外山、山

一里半なり一里半

死地に乗り入る六百騎

士卒たる身の身をもつて

答をなすも分ならず

並びて進む一里半

将は掛けの令下す

訳をたゞすは分ならず

これ命これに従ひて

死ぬるの外はあらざらん

死地に乗り入る六百騎

右を望めば大筒ぞ

前も左もまた筒ぞ

共に打出す砲声は

天に轟くいかづちの

響の如く凄まじや

弾丸雨飛の間にも

猛り立ちてぞ進むなる

死地にこそ入れ鰐の口

勇んで乗り入る六百騎

この詩は後に軍隊行進の際、軍歌としてよく歌はれた。

人生の詩

外山、山

そも靈魂の眠るのは

死ぬといふべきものぞかし

人の一生夢なりと

あはれな節で唄ふなよ

眠らにや夢は見ぬものぞ

わが世のことは何事も

夢と思へどさにあらず

此世の中は戦争ぞ

その戦争の中にあるて

人に生れた甲斐もなく

人に使はれ追はれつゝ

あゆむ羊や牛たるな

人に劣らず発奮し

功名手柄なすべきぞ

悲歌の詩

外山、山

無常を告ぐる入相の

鐘の音する黄昏に

三人の漁夫は帆をあげて
走らす船はすすめども
心の中は皆同じ
沖に向ひて佇める
儲けはうすく子沢山
州に打掛くる浪の音の
稼がにやならぬ男子の身

高僧ウルゼーの詩

おさらばさらばいざさらば
栄誉に永く別るべし
利運の端の芽出しなば
位に位重なりて
愚かな胸に思ふやう
天にも登る竜なりと

英国海軍の詩

イギリス国の海軍を
一千年の間

入り日をさして西の海
妻子のためにひかざる
父の出船を眺めつゝ
童子は外に余念なし
雨の降る日も風の夜も
いと凄まじき其時も
袖の干ぬのは女子の身

(以下略)

外山、山

再び逢はぬいとまごひ
人の習は皆すべて
八重咲匂ふ花ざかり
栄耀栄華を極むれば
運命強く願かなひ
悦び勇むおろかさよ

(以下略)

矢田部尚今

固く守れる水兵よ
汝が立つる大旗は

戦争のみか嵐をも

敵を受くともたゆみなく

軍はげしくあらばあれ

支え得たれば此後も

勇気の限りひるがへせ

嵐も強く吹かば吹け

(以下略)

墳上感懷の詩

山々かすみ入相の

しづかに歩み帰りゆく

漸く去りてわれひとり

鐘は鳴りつゝ野の牛は

耕やす人も打ちつかれ

黄昏時にのこりけり

矢田部尚今

四方を望めば夕暮の

唯この時に聞ゆるは

遠き牧場のねやにつく

景色はいとど物淋し

とびくる虫の羽の音

羊の鈴の鳴るひゞき

(以下略)

この詩は用語にも措辞にも新鮮味があり、明治の新体詩として後まで愛誦された。

船將の詩

暴威をもつて下を馭す

天地も容れぬ罪なるよ

阿鼻の地獄も及ばじな

嗜まんものあるならば

人は此世の鬼なるぞ

その過ちの深きこと

若しや今しも圧制を

わが此歌をよくきいて

矢田部尚今

其身を深くいましめよ

児童の詩

来れわらはべかたはらに
われらが多年苦しみて
忽ちとけて露ほどの

汝が遊びたはむるを
窓打ちあけて日に向ひ
清く流るる川水に

ヘンリー第四世

ヘンリー四世そのはじめ
一旦謀叛企てて

リチャルド王と戦いて
自ら立ちて王となり
天はいかでか乱臣を

ハムレット

(以下略)

矢田部尚今

汝が遊ぶ様見れば
なほとけざりし疑ひは
曇りも胸にとどまらず

見るは恰かも東なる

囀る鳥の声きゝて

のぞむが如き心地せり。

(以下略)

外山、山

ロンカストルのヂウクたり
六万人の将として

王をとりこになしたれば
四方に逆威をふるひしも
安穩にしておくべきや

(以下略)

矢田部尚今

ながらふべきか但し又

ここが思案のしどころぞ

これに堪ふるが大丈夫か

ながらふべきに非ざるか

運命いかに拙なきも

(以下略)

以上は訳詩であるが、創作の詩としては

拔 刀 隊

外 山 山

我は官軍わが敵は

天地容れざる朝敵ぞ

敵の大将たる者は

古今無双の英雄で

これに従ふ兵卒は

共に慄悍決死の士

鬼神に耻ぢぬ勇あるも

天の救さぬ反逆を

起しゝ者は昔より

榮えし例あらざるぞ

敵の亡ぶるそれまでは

進めや進め諸共に

玉散る劔抜きつれて

死ぬる覚悟で進むべし

(以下略)

この詩は西南の役の士気を吟じたもので、当時の児童走卒もよく歌ひ、また永く歌はれた。

玉の緒の歌

井 上 巽 軒

眠る心は死ぬるなり

見ゆる形はおぼろなり

明日をも知らぬわが命

あはれはかなき夢ぞかし

などとあはれにいふは悪し

(以下略)

勸学の歌

昔唐山の朱文公

わが学問をすゝめんと

一生涯は春の夜の

矢田部尚今

よに博学の大人ながら

少年易老の詩を作り

夢の如しと嘆きけり

(以下略)

鎌倉大仏に詣でて感あり

今をさること数ふれば

建長の頃鎌倉に

総青銅の大仏は

相好いとど円満し

何れの地にも比類なし

由比のつなみの難により

紫摩黄金も雨にぬれ

殆んどここに四百年

六百年のその昔

稲多野局が建てられし

御身のたけは五尺にて

見者無厭の尊容は

さるに明応四年とや

大殿破壊のその後は

風に暴され給ふこと

こはこれ人にきくところ

(以下略)

社会学原理に題す

宇宙のことは彼此の

規律のなきはあらぬかし

かすかに見ゆる星とても

外山、山

別を論ぜず諸共に

天にかゝれる日月や

動くは共に引力と

言へるは力のある故ぞ

(以下略)

新しい試みとしての新体詩に対しては、是非の評が轟々として起り、ある者は「拙劣鄙陋にして読むに堪えず」とさへ酷評したが、しかし短詩にもあらず俳句にもあらず、新詩形による新体詩の胚胎は、むしろ遅きにすぎる感があつて、平語をもつて、清新の新詩風を敢行した三人の進出は、大いに讃えられてよいものであつた。かくして新体詩は生れたがしかしその用語は粗笨又措辞は拙劣、詩感は低調であつたのは、覆いがたき缺陷であつた。「新体詩抄」の刊行に刺激され、これと雁行して、いち早く「新体詩歌」が上梓された。明治十五年八月に第一集、第二集を出し、翌年に第三集、第四集出た。「新体詩抄」に出た諸詩章を再掲載すると共に、小室屈山の「自由の歌」「外交の歌」の新唱を加え、他に琵琶歌「月照の入水」、太平記の「俊基朝臣東下り」、俗曲の「長恨歌」「西行」「小督局」軍歌調の「小楠公と詠ずるの詩」「楠正成桜井駅に於て正行へ遺訓の歌」「熊谷直実敦盛を追う歌」などが混淆し、新体詩の草創期の錯綜図を織り出したものとも見られるのであつた。

自由の歌

小室 屈山

天には自由の鬼となり

地には自由の人たらん

自由よ自由やよ自由

汝と我がその中は

天地自然の約束ぞ

千代も八千代も末かけて

此世のあらん限りまで

(以下略)

自由民権論が高まつた当時の思想を歌ひ、時代のひびきを詩にしたものであつた。

外交の歌

小室 屈山

西に英吉利北に露西亜

油断ななせそ国の人

おもてに結ぶ条約も

心の底は測られず

萬国公法ありとても

いざ事あらば腕力の

強弱肉を争ふは

覚悟の前のことなるぞ

嗚呼同胞よ兄弟よ

御国に生れし甲斐あらば

尽せや尽せ諸共に

まごころこめて尽すべし

芸術的純粹詩ではなかつたが、この種の新体詩の試作は、やがて明治二十年代になつて、詩の興隆を示すべき示唆となつた。

明治十八年十月になつて、わが国では初めての個人詩集が現はれた、湯浅半月の「十二の石塚」がそれである。ユダヤ国の民話を、伝統的な五七調の長歌の形式で詠じた長篇の叙事詩であつた。

和歌の浦の磯崎こゆる

白浪の知らぬ昔を

松かげの真砂に伏して

もとむともかひやなからん

久方の天つみそらに

群れ遊ぶ聖霊の鳩の

み翼にのらしめたまへ

わが神よいざ行きて見む

岩走るヨルダン川の

柳かげ高かやがくれ

風立ちてさざ波涼し

朝日さすエリコの城の

高どのも埋もるばかり

椰子の葉の繁るも深し

千早振る神のしろしと

白百合の立てるも高し

ギルガルの丘べにさける

(以下略)

優婉にして新味があり、朗々として唱さるべきものであつた。

明治十九年八月になつて、山田美妙の「新体詞選」が刊行された。尾崎紅葉、丸岡九華らとの共著で、新体詩十篇を収めた。

戦景大和魂

山田美妙

敵は幾万ありとても

烏合の勢にあらずとも

邪はそれ正に勝ちがたく

堅き心の一徹は

石に立つ矢の例あり

すべて烏合の勢なるぞ

味方に正しき道理あり

直は曲にぞ勝栗の

石に矢の立つためしあり

などて恐るゝことやある

風にひらめく聯隊旗

旗はとび来る弾丸に

身は日の本の兵士よ

斃るるまでも進めよや

しるしは昇る旭日子よ

破るる程こそ誉なれ

旗になぢぢそ進めよや

裂かるるまでも進めよや

旗になぢぢそぢぢなせそ

などて恐るゝことやある

などてたゆたふことやある

内容に新味なく詩としては価値あるものでなかつたが、大和魂を謳歌し、その激越した調は、世の歓迎をうけて、かの太平洋戦争に際しては、ラヂオで大本営から発表される戦況にテーマソングとしてさかんに歌はれたものであつた。

明治二十一年になつて、優婉にして清純の情趣のもりあがつた、詩らしき詩が初めて生れた。国文学者落合直文によつて作られた「孝女白菊の歌」がそれである。井上巽軒の漢詩に暗示されたものであるが、長編の叙事詩であつて、全篇の筋は、九州阿蘇山の麓、狛に行つたきりで帰らない父を尋ねて、十四才の少女白菊は山深く分け入る。山中行き暮れて読経の声をたよりに草庵につくと、僧は少女の身の上を聞いて同情する、草庵に泊つた白菊は、父は谷底に落ちて、茨の生いしげる中に生きてゐる夢を見る、険しい山坂を越える途中、山賊のために山寨へつれて行かれ、琴を弾かされる。そこへ先の僧が来て少女白菊は救はれ、やがて僧と分れ分れになつた白菊は、柴刈の翁に助けられ、その庵に二三年すごすうち、村の長に見染められ、深夜そこを逃れ、流れに身を投げようとした時、また先の僧に救はれる、僧は先に家出した白菊の兄であつた。山麓の家に帰ると、狛に出たきりで帰らなかつた父も帰つてゐた。

阿蘇の山里秋ふけて

眺め淋しき夕まぐれ

いづこの寺の鐘ならむ

諸行無常と告げわたる

折しもひとり門に出て

父を待つなる少女あり

袖に涙をおさへつゝ

憂ひに沈むそのさまは

色まだ浅き海棠の

雨になやむに異ならず

父は先つ日猶に出で

軒端に落つる木の葉にも

父や帰るとうたがはれ

今宵は雨さへ降り出でて

鳴くなる虫の声声に

かゝるさびしき夜半なれば

菅の小笠に杖どりて

八重の山路を分け行けば

さらぬも繁き袖の露

俄かに空の雲はれて

父を慕ひてまよひゆく

遠く彼方を眺むれば

何処の里かわかねども

松杉あまた立ち並び

今なほおとづれなしとかや

笈の水の響にも

夜な夜な眠るひまもなし

庭の芭蕉の音しげく

いとど哀れをそへてけり

ひとり思ひにたへざうむ

出で行くさまぞ哀れなる

雨はいよ／＼降りしきり

あはれ幾度しぼるらむ

月の光はさしそへど

心の暗にはかひぞなき

燈火ひとつほの見ゆる

それをするべにとめてめく

怪しき寺のそのうちに

読経の聲の聞ゆるは

籬も半ばやれくづれ

月の影のみ冴え冴えて

いかなる人の行ひか

庭には人のあともなく

梢のあたり風ぞ吹く

門べに立ちておとなへば

まつ間程なく年若き

しばし此方を打ち眺め

かすかに応ふ声すなり

山僧ひとり出で来り

怪しみるたるさまなりき

少女はそれと知るよりも

妾は怪しき者ならず

あはれ行末を知らしなば

やがて間近く進みより

父を尋ねて来つるなり

いかで教へて給へかし

少女の姿をよく見れば

柳の髪の乱れたる

にはへる花の顔に

この世のものにもあらぬなり

(以下略)

国文学者直文の国文脈の詩技は、全国青年子女の感傷を煽り、「孝女白菊の歌」は、たちまちにして新体詩界の女王になつたのであつた。後になつて詩壇に新詩をもたらし、暁の鐘をつきならした島崎藤村の詩篇も、その影響をうけてゐることはいなめなかつた。

明治二十一年留学を終へて、ドイツから帰朝した森鷗外は、落合直文、井上通泰、市村讚次郎、小金井喜美子（鷗外の

実妹」と結んで新声社（SSS社とも言った）を起し、同人の訳詩集「於母影」を出した。バイロン、レナウ、ゲーテ、ウエルマン、シエツフェル、ハイネ、ゲロツク、ケルネル、ホフマン、シエクスピア、フェルランド等の英独詩人、及び明朝詩人高青邱の詩を邦訳したものであるが、芸術の香り高く、訳詩臭なく、雅訓の七五調の詩は、曉にふきならす角笛にもひとしく清新のひびきを伝えた。

いねよかし（バイロン）

けさ立ち出でし故里は

青海原にかくれけり

夜嵐吹きて艫きしれば

驚ろきて立つ村千どり

波にかくる夕日かけ

逐ひつつ走る舟のあし

のこる日かげもわかれゆけ

わが故里もいねよかし

（以下略）

笛の音（シエツフェル）

君を初めて見てし時

そのうれしさやいかなりし

結ぶの思ひとけそめて

笛の声とはなりにけり

思ふ思ひのあればこそ

夜すがらかくは吹きすさべ

あはれと君も聞きねかし

心こめたる笛の声

（以下略）

花 薔 薇（ゲロツク）

わがうへにしもあらなくに

などかく落つる涙ぞも

ふみくだかれし花さうび

世はなれのみのうき世かは

わ が 星 (ホフマン)

思ひをかけしわが星は
たれのためにか輝ける
かゝる思ひを吹き払ふ

光をかくしいづこにて
心も空に浮くものを

(以下略)

オフエリヤ (シエクスピアー)

いづれを君が恋人と
月の冠とつく杖と

わきて知るべきすべやある
はける靴とぞしるしなる

かれは死にけりわが姫よ

彼はよみぢへ立ちにけり

頭の方の苔を見よ

足の方には石立てり

(以下略)

ミニヨンの詩 (ゲーテ)

レモンの木は花さき暗き林の中に
黄金色したる柑子は枝もたわわに実り
青く晴れし空よりしづかやかに風吹き
ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く
雲に聳えて立てる国を知るや彼方へ

君と共に行かまし。

(以下略)

鷗外は、この訳詩集当時のことを追憶して、「社中の人人は不忍池にのぞめる楼上に夜を徹して、此一巻を成しし時を憶ひ起せば、毎篇、毎句、毎字、一として感慨の媒ならぬはなし」と書いてゐるのを見ても、かりそめの筆のすさびではなくて、真劔にとりくんだものであつたことが分る。

明治二十二年四月、北村透谷は、「楚囚の詩」を出した。

かつて誤つて法を破り

政治の罪人として捕はれたり

余と生死を暫ひし壮士ら

数多あるうちに余は其の首領たり

中には余が最愛の

まだ蕾の花なる少女も

国のためにともろ共に

この花婿も花嫁も

(以下略)

と言うような破調の詩である。ついで翌二十四年五月「蓬萊の曲」を出した。長篇の戯曲であつた。透谷はすぐれた詩人であつたが、はげしく熱し、はげしく自省する透谷は、遂に二十七才の短生涯をもつて自らを殺した。

宮崎湖処子は、明治二十三年に帰郷随筆として「帰省」を出し、中に詩を挿んだが、その詩は新味横溢し、朗々として誦するに足るものであつた。

出 郷 関 曲

さてもめでたき此世界

いかに月日ののどかなる

小川に媼は衣洗ひ

野辺に翁は秣刈る

囲む高根のまへうしろ
浮世へだてし村の色

流るる水も右ひだり
今も昔の世に似たり

(以下略)

明治二十四年二月に、中西梅花の「新体梅花詩集」が出た。

くさふきのくさふきの

軒に匂へる干梅の

あつさを包み赤らみて

ほやり／＼と吹き来る

ぬるみし夏のはこり風

さすかに驕る昼顔も

耳あふられて芽もしほれ

花ひしけ行く田舎道

情熱の詩人であり、漂泊の詩人でもあつた梅花は、三十六才で遂に狂死した。

明治二十六年、坪内逍遙によつて「早稲田文学」が創刊され、全二十六年一月に北村透谷、島崎藤村、星野天知、平田秃木、戸川秋骨、馬場孤蝶、上田敏らによつて、「文学界」が創刊され、全二十八年には上田万年、高山樗牛らよつて帝国文学会が結成され雑誌「帝国文学」が発刊されて、これらはすべて新体詩を載せた。他に詩と関係深き雑誌には「国民之友」「伊良都女」「しがらみ双紙」「文学雑誌」「哲学雑誌」「日本評論」等があつて、新体詩は日を追うてさかになつて行つた。

明治二十九年七月に与謝野鉄幹の「東西南北」が出た。短歌と詩を集めたものである。

僑居偶題

書斎の塵は払はねど

仔細に太刀の錆は見る

よし貧賤に身をおくも

捨てぬ丈夫の意気一つ

去年の夏の此ころよ

われ韓山に官を得て

謀るところも多かりし

それも今更夢なれや

世はなげくまじ従うに

小史の怒りを買ふばかり

詩を癢せむか終にたゞ

才子の名のみ残るらむ

鉄幹は翌三十年に相ついて詩歌集「天地玄黄」を出した。

明治三十九年に大町桂月、武島羽衣、塩井雨江によつて、美文と韻文を集めた「花紅葉」が出た。

明治三十年四月、国木田独歩、田山花袋、松岡国男（後柳田国男）太田玉茗、宮崎湖処子らによつて「叙情詩」が出た。若き詩人たちの熱情こもる詩を集めたものであつた。

山林に自由存す

国木田独歩

山林に自由存す

われ此句を吟じて血の湧くを覚ゆ

ああ山林に自由存す

いかなれは吾山林を見すてし

沖の小島

国木田独歩

沖の小島に雲雀があがる

雲雀すむなら畑がある

畑があるなら人がすむ

人がすむなら恋がある

明治三十年八月になつて、島崎藤村の「若菜集」が出た。清新の声調に、青春の哀歡をもりあげ、優婉なる近代的姿態を整え、ここに日本では本格的の詩が生れ出たのであつた。